

# 北海道 協農周摩

〒088-32北海道弟子屈町407-3  
☎01548-2-2124

「開拓農民は大自然との勝負です」こんな言葉を聞いたのは、同じ開拓農民の子で、今は岩手県江刺市で大規模稲作を展開する家子憲昭さんからだ。

職業柄、全国各地の農業地帯を回るが、あれっと思うことがよくある。ものすごく条件の不利な山間地などで、とても立派な農業を営んでいる生産者がいることだ。そのルーツを聞けば、だいたい1、2代前に開拓農民として入植してきたという言葉が返ってくる。いつか訪れたところがある大分県玖珠郡九重町の江藤一美さんも、その一人だった。

「開拓農民はなぜそれだけたくましいのですか」

と聞いたことがある。その時の答えはさだかには覚えていないが、恐らく最初に入植した時には、山間地なら、まず死ぬ思いがする抜根作業が待ちかまえてい

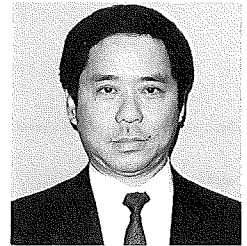
たし、その江藤さんにも「開拓農民はなぜそれだけたくましいのですか」と聞いたことがある。同じ町に開拓農協と、そうでない総合農協の弟子屈町農協がある。開拓農民魂で農協経営も大きな格差がつくことを証明したためだった。その経営格差がどこでつくか、徳永組合長に聞いてもハッキリと答えてくれな

た。そこで隣の標茶町に住む友人の酪農家に説明を求めたら、  
「農家の気構えが違うんだよ。何ごとにつけてもシビアなんだね。それに比べ弟子屈町農協の組合員は甘えがあるね。それはね、開拓農民は僻地に住むので集落を形成せず散在して住むからではないかな。山奥にポツンと暮らすということは、誰も頼る者がおらず、万事、自分で片付けなければならぬということの意味するのだ」という返事が戻ってきた。

「そりゃ、よく覚えてますよ。何でもやったもの。えん麦播きからえんろ播き。それに牛が3頭いたから、学校へ行く前に牛乳を搾って、それを自転車の後ろに積んで集乳所まで持っていったもんだ。冬は山稼ぎをやったよ。山に入って柴を刈ってくるんだ。高校では生徒会長をやったけど、日曜でも遊んだことがなかったね。仕事がたくさんあったもの。今の子供は過保護でダメだよ。おじいちゃん、おばあちゃん、自分たちの入植当時の

## 気構えが違う。自主独立の開拓者 魂が農協経営に大きな差をつけた

良い農協は「汗」が違う！  
エグゼクティブ農協探訪記 ⑩

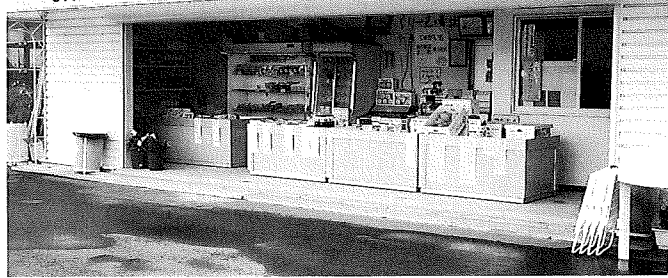


農業評論家  
土門 剛

どもん たけし/1947年大坂市生まれ。早稲田大学大学院法学研究科中退。「省益に走った農水官僚の100日」(中央公論94年3月)、「食管死守で焼けたる農水官僚」(This is 読売94年3月)、「懸案見送られた食管改革」(同94年7月)、「食管制度のあり方に関する調査懇談会」(エコノミスト94年8月)など、農業や農協問題についての規制緩和と国際化の視点からの論文を多数執筆。主な著書に、94年1月「農林中金の憂鬱」(日経フィナンシャル94)、93年10月「市場開放決断の日」(日本経済新聞)、92年11月「農協が倒産する日」(東洋経済新報社)、「穀物メジャー」(共著/家の光協会)、「東京をどうする、日本をどうする」(通産省八幡和男氏と共著/講談社)、「新食糧法で日本のお米はこう変わる」(東洋経済新報社)など。大阪府米穀小売商業組合、「明日の米穀店を考える研究会」各委員を歴任。

ことを忘れて孫に甘くてね。自分たちは、辛酸をなめたから、孫子には同じ苦しみ味わせたくないと思うんだね」

## JA 摩周農畜産物直売所



上 摩周湖の観光客を当て込んだロードサイドショップ

左 入植3代目の徳永哲雄組合長



弟子屈町地区の開拓は戦後間もなくのことである。当初、450戸でスタートした。農地は約5000ha。徳永組合長の両親も網走から入植して

きた。その当時は1戸平均10ha強だった。それで約半世紀を経て残ったのは110戸だ。今では1戸当たり60ha弱に増えた。開拓当初は、徳永組合長によれば、「10haで牛の3、4頭もいれば、ちよつと山仕事をプラスすれば何とか喰えたね。戸数が減ったのは、高度成長期に松だとか雑木を売り払って見切りをつけた開拓者も多くいたよ。それで最後に残ったのが、今の組合員だった」という状況だったという。

### 負債整理にも開拓者魂

摩周農協のバックボーンは、不屈の開拓者魂である。それは生産力が、優良農地に恵まれた弟子屈町農協より上回ることで証明されている。酪農を例にとれば、摩周農協の方が1戸当たりの年間搾乳量は70tから80tは多い370t台という。その秘訣は、「ハンデは山間僻地だけではありません。土も痩せて

いますからね。入植以来、土作りには精魂を傾けてきたね。畑を守るために輪作体系をしっかりと組み、プラウを使って深耕栽培にも心がけてきたよ」という。それでも土の力が劣るので、大豆の場合などは、平場と同じ収量をあげるには1戸で70haぐらいの規模が必要になるというのだ。

開拓農民は、何事も自分で仕事を片付けなければ生きてはゆけない。農協が中心となって機械を有効利用することも、その一つだ。蕎麦の収穫も、小麦用に購入したコンバインにアタッチメントを取り替えるだけで、機械の稼働率を高めることにした。それでメロンや芋までを収穫する。それで年間売上げを7000万円もある組合員もいるという。

農協の主産物は、酪農、馬鈴薯、ビール、小麦、蕎麦だ。それに最近では白菜や大根がレパートリーに加わった。メインの牛乳など畜産物は21億6700万円。ビールなど馬鈴薯など農産物は4億5000万円だ。販売合計で26億7000万円になる。貯金は23億2000万円。正・准組合員含めて1戸当たり1000万円になる。職員はパート4人を含めて29人。道内の他地域より少ない人数である。これでガソリン・スタンドまで経営している。

最近では、摩周湖を訪れる観光客を当て込んで農産物の加工にも力を入れている。町から摩周湖へ通じるロードサイドに特産品の直営店を設けた。地粉を100%使った蕎麦から、最近では徳永組合長が就任以来取り組んできたビーフジャーキーやひまわりバターの新顔が特産品

のライン・アップに加わった。特産品の収益もわずかながら数字に出てきている。昨年度は1400万円の収益があったという。

徳永組合長は農家の負債整理にも腕を振った。弟子屈町農協との合併話が起きた時のことだ。お互いに負債整理に手をつけねければならない。農業委員会の会長の経験がある。これを活かしてウルトラCを使ったのだ。そのカラクリは摩周湖である。

「負債農家は15戸いたが、土に生産力があつて、きちんとした区画の良い畑は別として、1ha程度の半端な畑を対象に転用をかけたんです。ちょうどその頃、プリンスがホテルを建てて観光開発を進めていましたので、それに便乗したんです。組合員は、農地を処分した金で民宿やらペンションを経営して、今はごく普通の生活を送っていますよ。そりゃ農地の何倍かで売れるんですから、借金の保証をしていた組合員も喜びましたね」

いま、摩周農協と弟子屈町農協の間で合併話が進行している。開拓者の集まりの農協と、そうでない農協の合併は、当初、難しいように思えた。何よりも経営格差がありすぎたし、組合員の気質も違いすぎるからだ。経営面でも自主独立の気風が横溢している。それは人員面でも表れている。周辺の農協に比べ職員数がダントツに少ないのだ。

それでも徳永組合長は、組合員を説得して合併にゴーサインを出したという。開拓者魂で合併を乗り切り、新しい時代の農協を作りたいと考えたからだ。